

2021年12月13日(月)

老球の細道645号

大谷翔平選手の二刀流から想うこと

会津バスケットボール協会 室井 富仁

大リーグ、エンジェルスの大谷翔平選手がアメリカンリーグのMVPに選出されたことは今年の世界スポーツ界にとって画期的なことだった。特に近年、日本の若手アスリートの世界的な活躍は注目するところであり、その中でも大谷選手の注目度はNO1だったのではなかろうか。特にコロナ禍や東京オリパラの開催云々のゴタゴタの中での活躍だったので一服の清涼感を与えてくれた。そしてその後の「国民栄誉賞」辞退においては「さすが!」としか言いようがなかった。2001年に受賞したイチロー選手もこの賞を辞退している。

そもそも「二刀流」とは、剣豪宮本武蔵で代表されるように、本来は左右の手に「相手を攻める力」「相手の攻撃から守る力」それぞれを持って戦う戦術を言うのであるが、野球の大谷選手の場合は打者と投手の役割を同時にうまくこなす意味で使われている。同じシーズンに投手で二桁勝利、打者で二桁本塁打を達成すると1918年のベーブ・ルース以来の快挙だったようだが、投手であと1勝足りなかった。

2018年に大谷選手が大リーグに挑戦する時、二刀流に対する批判が数多くあった(「出る杭は打たれる」が今では「出過ぎた杭は打ちようがない」)。練習時間の分散につながり、調整や課題解決の練習がおろそかになる、打って、走って、スライディングとなるとケガのリスクが高まる、100年に1人の大投手なので才能の無駄使いをせず投手に専念すべきである等..。

しかし、そんな批判をものともせず今シーズンは大活躍をした。そもそも野球では、高校野球を見ているとわかるように投手で4番打者とか、投手で好打者というパターンが多いのではないだろうか。小学校時代野球少年だった私は、当時を思い出してもピッチャーだった人は皆例外なく打撃も凄かった。要は、一芸に秀でる者は多芸に秀でるのである。

ところで、二刀流の類語として「二足のワラジ」という言葉がある。江戸時代に生まれた言葉で、博打打ちが別の博打打ちを取り締まる仕事(岡っ引き)を兼ねていたことから、本来両立することの難しい性質である仕事に就くことを「二足のワラジを履く」と言われた。

私が福島県教員チームで現役選手としてプレイした頃、大先輩から「教員チームは三足のワラジを履かなければならない」とよく言われていた。選手、コーチ、審判の三足である。当時県大会(県総体、県選手権)があると、この三つの仕事を掛け持ちでやらなければならないので疲労は並々ならぬものがあった。今思えばよくやったものである。

前述したが一芸に秀でる者は多芸に秀でる。ある心理学者によると、一芸に秀でる人は「3つの人間力」があるという。①努力家、真面目②集中力、継続する粘り強さ③自己管理、時間管理。一つのことにがんばり、それなりの成果を上げた人たちは他の事でも良い成果を上げることができる。なぜなら世の中の成功(自分自身の最高のパフォーマンス発揮)の原理原則は皆共通だからである。大好きなバスケットボールで「3つの人間力」を育てたい。